

## トランスジェンダー男性の子を持つ母親の“経験”

勝又栄政（立命館大学大学院）

家族社会学の分野では、家族や親子に在るはずの性的マイノリティの存在は長い間不可視化されてきた。しかし近年、トランスジェンダー（下記より TG）をはじめ性的マイノリティの社会的認知に伴い、当事者とその親（特に母親）に焦点が当てられた研究が蓄積されつつある（たとえば、三部 2014; 元山 2014; 石井 2018 など）。本報告では、その中でも「TG の子を持つ母親」に焦点をあて、親側が抱える複雑な事情や文脈の理解を行う。

先行研究を「非異性愛の子を持つ母親」を対象としたものと、「TG の子を持つ母親」を対象にしたものに2つに分け整理すると、非異性愛者の子を持つ母親の研究では、子の受け容れやすさがたさには、異性愛規範や同性愛嫌悪の影響が析出されている。また、カミングアウト時に子を受け容れがたい親も“多様な性”の情報を得ることで認識を変容させ、子と関係性を再構築し、自ら周囲へカミングアウトをするプロセスが見られている（三部 2014; 元山 2014）他方、「TG の子を持つ親」の場合は、身体治療を伴うなど、TG 特有の葛藤や経験も見られるが、“多様な性”の情報を受け、認識変容—関係性再構築へのプロセスは同様の指摘がある（石井 2018）。

しかし、いずれの研究でも、当事者コミュニティや団体に繋がっている母親を対象としていることが多く、対象者は「情報を得やすい環境にいた母親」である可能性がある。また、インタビュー内容については、カミングアウト時から先のプロセスを重要視した分析がなされており、母親の反応や対応に影響を与えたであろう「母親の過去の人生の文脈」についての記述は少ない。そのため、ジェンダー・セクシュアリティに関する規範以外の経験や要素についてはまだ不透明な部分があると考えられる。加えて、過去の母子関係の研究から、母—息子、母—娘関係において差異が見られていることを踏まえると、TG の子 (TG 男性 or TG 女性) 及び親 (母親 or 父親)、双方の性別による関係性を踏まえ、分析をすることは重要である。

以上のことから、TG の子と親にある 4 つのダイアド (①TG 男性—母、②TG 男性—父、③TG 女性—母、④TG 女性—父) を意識し、本研究ではその中でも「TG 男性の子を持つ母親」に焦点をあて、母親の主観的経験を聞き取り、親側の抱える複雑な事情や文脈の理解を行うことを目的とした。具体的な方法として生活史調査の手法を用い、半構造化インタビューを行った。調査協力者は、「TG 男性の子を持ち、当事者団体への参加経験のない母親 (50 代～60 代) 5 名」である。(尚、上記②～④の調査も同時に進めており、今後別稿に記す予定である)

本報告では、まず、母—娘関係、母—息子関係、母—TG の子関係についての先行研究の整理を行う。次に、TG 男性の子を持つ母親の主観的経験についてのインタビュー調査をまとめる。調査結果では、たとえば、①受け入れがたさを持つ母親が過去の経験の中で“ボーイッシュな女性”などに含まれる多様な女性の在り方を知っており、固有のジェンダー規範が緩やかであるからこそ「男の子っぽい女の子ぐらいの感覚で。いや、だからそれ (男になりたいというのは) 勘違いだからって」と諭す様子が見られたり、②子どもを受け入れる理由が「子どもの荒ぶった感情の波が落ち着くならなんでも良い。これは性別の問題じゃないから (LGBT などについて) 勉強なんかしたことない」と、“性別移行”を過去に見られた子どもの問題行動を失くす手段としてのみ位置付け、既存のジェンダー規範は温存される形で親子関係が継続されている事例などを紹介する。結果から、先行研究で指摘されていた「異性愛/ジェンダー規範が強いため子を受け入れにくい」、または、「性の多様性概念を知ったため子を受け入れる」という枠組みでは語りきれない、母親の経験の複雑さや実情について考察し、報告する。

## 参考文献

元山琴菜, 2014, 『カミングアウトされた家族』から<非異性愛者をもつ家族>になることとは——『家族崩壊』に対応する母親役割に着目して』『家族社会学研究』26(2): 114-126.

三部倫子, 2014, 『カムアウトする親子——同性愛と家族の社会学』御茶の水書房.

石井由香理, 2018, 『トランスジェンダーと現代社会——多様化する性とあいまいな自己像をもつ人たちの生活世界』明石書店.

(キーワード: トランスジェンダー、トランスジェンダーの子を持つ親、母子関係)